中野重治全集

第三卷

筑摩書房版

中野重治全集第三巻

昭和三十六年八月十日　発行
定価　六五〇円
著者　中野重治
発行者　東京都千代田区神田小川町二ノ八　古田晁
印刷者　東京都三鷹市上連雀九九〇　亀井要
発行所　東京都千代田区神田小川町二ノ八　筑摩書房
電話　東京(291)七六五一(代表)
振替　東京　一六五七六八
印刷　株式会社三省堂
製本　株式会社商陽堂

© 1961, Shigeharu Nakano (Printed in Japan)

目次

五勺の酒 …… 三
太鼓 …… 三四
おどる男 …… 五〇
軍楽 …… 五八
ヤナギのたなばた …… 七一
夜と日の暮れ …… 七三
吉野さん …… 八五
よこれた汽車 …… 一〇八

アンケート断片……一一六
写しもの……一三六
樟脳と新かな……一八八
第三班長と木島一等兵……二〇三
角力とろうの国……二一八
その身につきまとう……二三〇
焼酎とファシズム……二四三
男いとこ……二六一
米配給所は残るか……二七六
秋の一夜……二九八
広重……三三四

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

司書の死……三五〇
空白……三六四
公正への誘惑……三八二
湯屋と温泉……三九八
荒れた屋敷……四一七
親との関係……四二五
橋……四三四
ある五十代の男……四四四
孫とおばば……四五三
指輪……四七四
軒さき……四九六

萩のもんかきや……五一三
ヒサとマツ……五二五
解題（中西浩）……五五九
作者あとがき……五三五

中野重治全集　第三巻

五勺の酒

会えなかつたのは残念だがそれでよかつたか知れぬとも思う。会えば書かぬことになつただろう。会つて話したのでは話がそれて行つたろうと思う。この頃部分的にモーロクしてそういう傾向がつよくなつた。久しぶりで会つた時の空気は古い知合いに強くひびく。字でかけば幾分でもそれが防げようと思う。とかく書いただけは独立するというものだ。

何から書いていいか、書いても書きつくせぬ、話しても話しきれぬといつた具合だ。しまいのところへ「この項つづく」と入れるつもりだが、忘れてぬかしてもそのつもりで読んでほしい。未練がましいが初めにお願いしておく。

未練、未練。まつたく僕は未練がましくなつた。何にたいする未練か。万事万端べた一面の未練だ。家族の顔、見おろす生徒の顔、わが半生、何もかも未練だらけだ。老醜という言葉があつてわかつたつもりでいたが、どの辺から老醜がはじまるか考えてみたことはなかつた。未練が老醜のはじまりでないだろうか。半生でなく三分の二生だ。もつと五分の四生だ。この三分の二生、五分の四生をふり返つて、残りの三分の一生、五分の一生に未練が出る。「十七歳、フランスが目の前にぶら下つている……」ぶ

ら下つてはもうおらぬこと、そういう、返せぬ過去への未練でない。将来への、未来への未練だ。行住坐臥、霧のようにのぼつてくる未練にむせむせ、未練を感じ出した年齢から、これからの年齢を円筒のようにのぞき込んで感じる精神のよろめきだ。君は知るまいが、僕はむかし新人会へはいろうとしたことがあつた。しかしはいらなかつた。警察署長という親父の職業が取次ぎの学生を逡巡させたのだ。彼は拒絶するかわりに僕をさけた。あからさまではなかつたが僕は淋しく身をひいた。それから僕は教師になり、生徒にいい評判をとり、校長になり、今や追放か、でないかというところへきた。新人会幹事はまちがつていただろう。しかし僕はなぜ、さびしい思いなぞを抱いて教師になつただろう。さびしい思い、馬鹿め……僕は地だんだを踏んであと十五年かそこらの残りを考える。

僕は実際のところ、僕らの少年時代の親たちや教師や校長があつたようにはありたくないのだ。少年たちを理解し、忠言をあたえ、出て行く彼らを窓から心で手を振つて見送るというようなのがいやなのだ。這つてでも彼らといつしよに行きたい。むしろ彼らを鼓舞激励したい、彼らをみちびきたいのだ。教師になつた僕はペスタロッチだのフレーベルだのルソーだのを読んだ。アメリカの教育法、ソ聯の教育法から、中江藤樹、山鹿素行、松下村塾などいうものまで読んだ。そして最後に残つたのがコロレンコの小説の某という家庭教師だつた。小説の名も忘れ、コロレンコでなくてゲルツェンだつたかも知れぬ。とかくそれはロシヤへやつてきた渡りもののドイツ人青年家庭教師だつた。ロシヤ貴族特有の半アジヤ的空気のなかで、身分の低い若いドイツ人が一心に子供を教えて、子供がまたなつく。馬鹿にされながら、居候扱いされながら、子供を、持つてきたヨーロッパで教育して、師弟は学友になり、この師弟・学友関係がもうひとつ高い段階へのぼろうとするところである朝教師が逃亡してしまう。私は君を

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

私の能力の限界まで教育しました。これ以上君に教えることは私にありません。私はほかへ出かけましょう。こう置き手紙をして手ぶらで逃亡してしまう。どんなにその美しさが僕を打つただろう。おれの持つてるものを少年たちに与えてしまおう。そしたら逃亡だ。こうしてこの青年は、教師になつた僕がたえず後ろ姿として行く手に見てきたものとなつた。生徒たちによかつた僕の評判には、この逃亡ドイツ青年の影響が実にあつたろうといま思う。

そこでどうかというと、なま若い僕がそんな気でつとめてきたことを僕は今あわれむが、持つているものを与えられるかどうか、まわりがそれを許したか許さなかつたかとなればそれどころかだ。自分全部を与えることが許されぬとわかつた僕は五分の四の自分を与えようとした。それが許されぬとわかつたときは二分の一を与えようとした。それが駄目とわかつたときは三分の一、つぎは四分の一、つぎは五分の一を与えようとした。最後には何分の一でなくただ僕自身の僕による何かを与えようとした。僕は慄然とする。五分の四を与えたと思つたとき他の五分の一を僕が与えなかつたろうか。二分の一を与えたと思つたとき他の二分の一を、三分の一を与えたと思つたとき他の三分の二を与えなかつたろうか。何分の一でなくて、せめてただ何かを与えようとしたとき全部を他で与えなかつただろうか。すくなくとも僕は——戦争、戦争——すべてが、他で与えられるのを見送つてきた。すべてを与えて逃亡する、その逆が僕に道として与えられた。僕はただ、征伐・出征の征を「ゆく」とよむのは間違いだといつて生徒たちに教えられただけだ。(英語はなくなつて僕は国語をときどき見ていた。)また応召という言葉がはやつて「応召される」という受け身の形が生徒の作文に出てきたとき、それは間違いで応召「する」でなければならぬ、受け身なら「召集」されるだといつて主張できただけだ。そしてそれさえ、僕の説

をうけ入れていた若い国語教師が召集されて、その送別会のかえり、思いつめたような「校長先生……」という呼びかけで呼びかけられたとき完全にへたばってしまった。彼はそのときも僕の説を認めていた。ただ彼は、「征」を「ゆく」と、この際、彼のためによませてくれといった。燈火管制でまっくらな垣根道をたどりながら、「校長先生……」というよびかたにショックを感じなくなっている僕を僕はみとめた。「それだけは勘弁してくれ。」という代りに僕は彼の乞いを入れた。

僕はこの話が誰かにしたかった。誰かに聞いてもらって、その誰かから、むしろ何ものかから、諒解が得たかった。僕は焼けだされて以来きていたよし子を相手にえらんだ。しかし、実行はしなかった。サイパンのことは報道されていた。生きてるかも知れぬという希望をもっていたが、三人の子供を並べて立たして、頸の線が斜線になるなどいっている妹にそれはできなかった。(玉木は確実に死んだことがわかった。四四年春、蘇満国境からまわされるとき一月ほど東京にいたがよし子も誰も面会はできなかった。サイパンへは横浜から立った。その船が小笠原沖でやられ、七百人ほどのうち四百人ほどが救われて改めてサイパンへ渡された。そのなかに玉木はいた。そのうち四人生きのこってその一人が最近きてくれた。よし子は君を、玉木から聞いて知っているそうだ。よろしくといっている。彼女はせっせと稼ぐが知れたものだ。どうしたわけか、玉木家は子供三人ともこっちに置いてほとんど援助してくれぬ。本人も考え、僕も苦しいので、今度の上京はよし子の仕事口にも関係していた。あの通りの玉木は男だった。義理の弟だからではないが、彼は少数のいい出版をした。そう墓に書いてもおかしくはないだろう。この頃僕はよし子が新聞広告を見るのに気づいた。本屋の広告を丹念に読んで知らぬ顔をして台所口から出て行く。もともと彼女は本屋のことには口出ししなかったらしい。玉木の召集後は玉木の

指図で店をうり、それは食つてしまつた。彼女を特別あつかいしようとは思わぬが、出版が自由になつたための彼女の口おしさは僕は見てやりたいと思う。)

しかし間もなくきたグライダー練習開始が最大の失敗だつた。国語教師の「征く」以来僕はまいつていた。原因はいろいろあつたろう。内原のかえり、君に会つた時ほどの元気はその時分もうなかつた。内原では頑張つた。県にたいしても文部省にたいしても頑張つた。予科練、兵学校の割当てでも前青春防衛のために猿智慧をしぼることも辞しなかつた。しかし今やまいり、猿智慧の余地もなくなつていた。

ある晴れた日にグライダーが飛ぶことになつた。全部の試験が終つて教官が声をかけた。どんな言葉だつたか忘れてしまつた。軍人教官へたいする反感は今まつたくなし、その時も、すくなくもそれに関しては微塵なかつた。ただ彼は、ひとついかがですという意味の言葉を軽いからかう調子でいつた。僕が受けて立つた。それまでに僕は永いことこの男とやり合つていた。教師をしていると、子供たちの前青春が感覚的にいとしまれてくる。それを取られまいとしてやり合つてきたのだ。イキサツがヒヤカシ言葉に絶対なかつたとは言いきれぬか知れぬ。しかしその時の限り、それを根に持つてこの男がそれをいつたのではなかつたし、僕も挑発でそれに乗つたのでは決してなかつた。僕は自然で、多少うろたえつつ教官もごく自然にしたがつた。

僕は飛んだ。大胆に。何と説明しようか。僕は死にたかつたのだ。死のうと思つたのではない。死を恐れなかつたのだ。恐れなかつたというのが、実は無智からもきていたのだが。飛びながら僕は全くたのしかつた。雲、丘、河原、すべて色が美しかつた。ええい、飛べ、つつこめ、(そしていうならば死ね)……一種の放蕩だ。悲壮ぬき、責任まつたくぬきで上の空で僕は飛んだ。ひどい結果が来た。生徒

たちが無言で昂奮して行つた。しんとした彼らの昂奮が眼のなかが乾いてくるほど僕へ吹きつけた。玉砕精神、今では誰もつかわぬこの言葉のかさかさした音が僕に疼いてひびく。彼らの小さい肉体、手の平をくぼめて受けられるほどのたましい、その完全な染め。かてて加えて長女が豊橋の海軍工場へどうしても行くと言い出して留めることができなかつた。

未練、未練。とめ度なく僕は未練がましくなる。その証拠にこれを書留で出す。よし子のことで役場だ、留守業務局だ（なぜただ留守局とせぬのだろう。）とさんざんやつた揚句、僕はハガキ一枚でも書留で出すことにした。はじめ局の娘たちが、不思議がつて見た。ハガキまで書留にする中学校の校長。半年来彼らは笑いをかみ殺さなくなつた。代りに不愉快な目、わざと厄介をかける奴という顔をする。軽蔑、小さい憎悪、低能者にたいする寛大な憐憫。それ以上娘たちを刺戟せぬことで僕は満足する。僕の長女の方が彼女たちより年上なのだ。東京も遠くなり、旅行もつくづく重荷になつた。何彼につけて年を考えるようにもなつた。笑われるか知れぬが、笑わば笑え、おのれの年で誰は何をした、誰はどんな地位にいたなどということが頭へきて叶わぬ。それも誰々が偉大な奴ででもあればだが。

しかし無論、未練は未練だ。どうぞして未練から解放されたい。僕は決心をする決心をした。そこで君に相談しよう、議論しようというので訪ねたわけだ。今夜は憲法特配の残りを五勺飲んだ。そして酔つた。もともと僕は酒好きではなかつた。学生時代君らと飲んでも格別うまいとも思わず、酒が飲みたいともさほど思わなかつた。今は飲みたい。実に酒が飲みたい。「破戒」に出てくるヨボヨボのやくざ教師、あれが酒の香をかぐというところがあつてわからなかつたが今やシンパシーでわかる。銚子の口の上へんを迷うすぐ消える湯気みたようなもの。あれを鼻で吸うと、微粒子のようなのが粘膜へくる。

それがしびれるほど誘惑的だ。全くヨボヨボのやくざ教師だ。このやくざ教師は按摩の味を覚えた。按摩がない時は末の子供に背中を踏ませる。それで足りぬで灸をすえようと思うことさえある。酒を飲むとも飲まれるなというのの反対、飲まれたいという欲望だ。教師生活、戦争生活、最初の妻の死、再婚、大きくなる子供たち、玉木の死と、よし子の、出戻りでなく、何というか、肩も腰も石をみたようになり、そして一杯の酒が飲みたい。訴えようのない、年齢からくる全く日常的散文的ないぶせさ、とかく一杯飲んで、とかく寝てしまいたい。酒飲みには別の飲み方があるか知れぬが、僕はそうだ。職責（？）がら国民酒場の行列には立たぬが、ああして並んで、恥も外聞も忘れたように待つている人生の敗残者といつた人たちに面をそむけて僕は同情する。僕はこの頃子供のころの在郷歌を思い出した。童謡だ。「雀すずめ、なしてそこにとまてだ。腹こすぎて（腹がすいてだ）とまてだ。腹こすぎだら田つくれ。田つくればよごれる。よごれだら洗え。洗えば流れる。流れたら葦の葉にとまれ。とまれば手きれる。手きれだら麦の粉をふりかげれ。振りかげれば蠅とまる。蠅とまつたらあうげ。あうげばさびよ（寒いよだ）。さびがらあだれ。あだればあづいよ（火にあたれば熱いだ）。あつがらひつこめ。ひつこめばとぜね（とぜね、さびしいだ）。ひつこめばとぜね。とぜねがら（さびしけれや）酒呑め。酒呑めば酔う。酔つたら寝れ。寝れば鼠にひかれる。起きればお鷹にさらわれる。」だ。誰が文句をつくつただろう。とぜねがら酒のめ。さびしければ酒のめ。酔つたら寝れ。つまりこれは、日本の「家」を歌つたものだろうか。僕は末の子を溺愛しているがこれは二度目の妻の子だ。二度目のは、まだいわなかつたが最初のの妹だ。最初のが娘二人おいて死に、実の妹と再婚した僕は子供を避けてきた。しかしできたとわかつた時は男をほしいのと男であつてくれねばいいがというのとで挟まれて悩んだ。仕合せと女が生まれ、

男であつてくれたらと思う一方、女で大つぴらに溺愛できて助かつてきた。そしてやつとこの頃それを妻に語ることができた。妻を愛せよ。二度目の妻をわけても愛せよ。一度目の妻、その子供、それから父、うち揃つて最初の妻の記憶がなつかしく語りあえねばならぬ。あわれな父、あわれな母、それをしよい込まされるあわれな子供たち。とぜねがら酒のめ。君のところではどうだか。僕はこの頃、日本の女という女がつけている、足の甲の、くるぶしのすぐ下の坐りだこ、あのあざのような皮膚の部分が眼をはなれぬ。年ごろになるまであんなものはない。嫁入り仕度、そこでそろそろ出来、結婚、母親、それで完成する。最初の妻にもあつた。今の妻にもある。娘たちにはまだない。僕は娘たちにだけはあんなものを出かせたくない。それだけ妻の足の坐りだこを撫でてやりたいよ。すべて日本の女の足の坐りだこを撫でてやりたいよ。日本の女の取りあつめたあわれさ、たこ。そして女という女の足に坐りだこをつくるものの男への反射が酒を求めさせる。ただ、末の子のことで語りあつたため僕らは新しい境地へ来られたようだ。これはたいしたことだつた。これ以上産れるはずもないが、仮りに今後男が生まれるとしても僕はらくに愛せそうに思う。とぜねがら酒のめ。酔つたら寝れ。その年にきて、僕らは、坐りだこの出来た妻を新しく愛せねばならぬのだ。妻への不満、夫への不満、それを思いすてるべきでないのだ。女で四十すぎ、男は五十ちかくになつて、孫を生むほどになつて、尾骶骨の下のくぼんで皺になつた皮膚がうす汚く黒ずんできて、その時になつて改めて求め求むべきなのだ。

そこで聞きたいが、僕の学校にも青年共産同盟が出来た。大分まえに出来た。見ていて僕が気がもめてならぬ。まずこんなことがあつた。共産党が合法になり、天皇制議論がはじまると、中学生がいきなり賢くなつた。頭のわるくない質朴な生徒、それが戦争中頭がわるかつた。それがよくなつてきた。ち

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com